



くらはし

舞鶴市立倉梯小学校
学校だより3月号
令和8年2月27日

背中をつなぐ学び

ある朝のことです。私は毎朝、登校指導の際に校内や学校周辺のごみを拾いながら子どもたちを迎えています。しかしその日に限って、所用があり立つことができませんでした。すると登校してきた6年生の児童が、何やら小さな物をいくつも手に、職員室の私のところへやってきました。手の中には、おやつ空き袋など、グラウンドに落ちていたごみがありました。

「ごみを拾ってきました。」

その言葉を聞いた瞬間、胸の奥が熱くなるのを感じました。どうしてこの行動に至ったのか気になり、後ほど担任の先生に話を聞いてもらおうと、「校舎からグラウンドを見たらごみがあったので拾いに行った。」とのこと。理由がどうであれ、行動化につなげたことに大きな価値があります。私が黙々と続けてきたごみ拾いを、子どもたちは見て、感じ、自ら動いてくれたのでしょう。“見て学び、感じて動く”まさに、**行動は「心」の表れ**です。

そんな6年生は今、6年間の国語学習の集大成である物語「海の命」に取り組んでいます。この作品は、漁師の家に生まれた少年・太一が、父や与吉じいさの生き方から“命や自然と向き合うこと”を学ぶ物語です。太一の父は命の重みを知りながら海へ向かい命を落とします。与吉じいさは「千匹に一匹でいい」と自然の理を大切に漁を続けています。太一は二人の背中から、「自然を敬う」「必要以上を求めない」「誠実に生きる」という姿勢を受け継ぎ、成長していきます。

子どもたちの学習ノートには、こんな記述が見られます。

「太一は、海で生きていくため、おとうや与吉じいさの思いをつなぐために、父を破った大魚である瀬の主を殺さなかったんだと思います。」

「“千匹に一匹でいいんだ。千匹いるうち一匹をつれば、ずっとこの海で生きていけるよ。”

という与吉じいさの言葉やおとうの思いを胸にもってたから、太一は、海で生きていけたんだと思います。」

物語の山場である「瀬の主」との出会いは、太一に大きな葛藤を生みます。目の前に一生に一度の大物がいる。誇り、伝統、欲、自然の理、太一はそれらすべてと向き合い、最終的には父や与吉じいさの生き方を思い返し、命を奪わないという選択を決めます。これは背中を見て育ち、その意味を自らの中にかみしめ、行動につなげた姿そのものです。

6年生がごみ拾いをした行動にも、同じ学びの構造があります。大人の言葉ではなく姿から学び、自ら考え、そして動く。その姿は、物語の太一の成長と重なります。本校の6年生は、日々の生活と学習を通して、大きな節目である卒業を前に「命」「責任」「選択」「生き方」という本質的なテーマに向き合っています。

6年生の運動会で見せたあきらめない姿、合唱で仲間と声をそろえ、声を重ねて作り上げたハーモニー。それらは、下級生にとって大きな手本であり、「ああなりたい」という憧れを生み出しています。6年生の生き方は、すでに本校の伝統を形づくり始めています。背中から背中へとつながる学びの連鎖は、これからの学校を豊かにしてくれるでしょう。

そして、いよいよ3月。大きな節目を迎えます。卒業までの日数を指折り数えながら小学校修了という節目の重みと、6年生が残してくれた**“無形の財産”**の大きさをあらためて感じています。6年生が示してくれた背中へ、後輩たちのこれから進むべき道を示してくれることでしょう。本校は、その思いと姿勢をしっかりと受け継ぎながら、まとめの年度末を迎えます。

校長 四方 直人